

# カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第16回 今井 敬子 氏 ポーラ美術館学芸部 課長

## 「アクチュアルなエネルギー、新鮮なひらめき。それがピカソとカタルーニャです」

第16回は美術展「ピカソ 青の時代を超えて」を企画実施されたポーラ美術館(箱根)の今井敬子さんです。最新の科学調査では「青の時代」のピカソ作品の下には複数の絵画層があることが判明し、その描き直しの軌跡を「青の時代ラボ」としてムービーで紹介し評判を呼びました。現在は箱根から西へ、共催のひろしま美術館で開催中。5/28まで。



**AMICS** 学芸員というお仕事に興味を持っています。その辺りから伺えますか。

**今井** 学芸員という資格に出会ったのは大学に入ってからです。クリエイターにはなれなくても美術に関わりたい。その思いであちこちの美術館や美術展を巡りました。さらにルーヴル美術館の付属の学校に学芸員を養成する課程があるのを知りました。ルーヴル美術学院:エコール・デュ・ルーヴルです。卒業後はここへ進学していちから美術史を学び始めました。教師陣はパリ大の教授や、美術館の学芸員や館長であったりします。いちばんの特長は美術館の中で実物を前にして学ぶ授業です。目標はどのような作品であれ、ディスクリプションがちゃんとできるようにすること。そのためには美術史そのものが完璧に頭に入っている必要があります。とにかく暗記しなければなりません。この美術学院の3年時にダブルスクールをしてソルボンヌの修士課程をとりました。

**AMICS** 当然ピカソも重要な研究対象だったわけですね。

**今井** パリに留学していた1993-97年には、パリのピカソ美術館には名物館長がいたんです。文筆家としても有名で新聞、テレビなどのメディアにも登場し、政治に関わる発言も躊躇しない方でした。当時のピカソ研究者たちは、現代美術にも目が行き届き、「ピカソはアクチュアルな現代作家である」という主張を持っていました。ピカソは今を生きている人間にとっても過去ではなく、今から先、未来を予言させる心動かすとても新鮮な芸術家である。名だたる先生たちに繰り返しそう教わったんです。私自身、近代美術～現代美術を専攻していたわけですが「ピカソは特別ななあ、彼の作品にはいつもひらめくものがある、解明し尽くすことができない芸術家なんだな」というような体験がバ

リでの学生生活で自分にうめこまれました。

**AMICS** 帰国後はポーラ美術館でさらにピカソと関わられることに…

**今井** 日本に帰ってきて就職活動。ポーラ美術館の準備室の募集にめぐり合いました。コレクションのリストだけでフランスで学んできたことズバリでした。さらに準備室に入ってみると「こんな素晴らしいピカソがいるんだ」とびっくり。しかもまだ準備室でしたからそれが会社の中に飾ってある!こんな誰も観れないところに!これを美術館を開くことによって日本だけでなく、世界にお披露目できる、これは大切な仕事だと思いました。ポーラ美術館が最初にピカソの企画展を開催したのは2006年です。5つのテーマに絞りました。その中でもオルタ・デ・エプロ(現オルタ・デ・サン・ジュアン:カタルーニャの南部)で描かれた作品は大変貴重なのですが、それがこちらには2点もあります。ピカソがキュビズムに移って行く時代なんです、それまで日本で



オルタ、サンタ・バルバラ山の風景写真 撮影:今井敬子

**AMICS** 今回の「青の時代を超えて」はひろしま美術館との共催ですね。研究成果をまとめられた「青の時代ラボ」も新鮮でした。

**今井** そうです。2006年のピカソ展はまだポーラ美術館のコレクションをお披露目することが主たる目的でした。そののち、両館でお互いに「青の時代」を代表する作品を持っていることから先々、持ち寄ってというのでもできたらいいなあとお話していたんです。今回の企画は2018年くらいからですね。実はその前に印象派の展覧会を共同企画したんです。東と西というバランスがいいこと、どちらもプライベートな美術館であること、そんなことで交流もうまくいきそうな手応えを感じていました。この年に私たちはワシントン・ナショナル・ギャラリーの方に来ていただき「青の時代」の代表作である《海辺の母子像》の作品調査を行いました。その際、ひろしま美術館も回っていただきました。準備室の時代から表層の不思議な凸凹や、グラスに見える箇所には気がついていて、その後、東京文化財研究所が撮影したX線写真にははっきりとした女性像が認識できたんです。海外の美術館との共同調査ではその女性像は中間層で、その上に自画像らしき男性像、最下層には子どもの像があることが判明しました。こうした塗り重ねられた構造が、この時代のピカソの制作プロセスを示しています。さらには生乾きの表面にフランスの日刊新聞のインクが付着していました。バルセロナで描かれたと思われる作品が、正しくはパリで制作されバルセロナへ運ばれたということになります。この研究成果をアメリカと日本

で同時にリリースし、その年の末には私がバルセロナのピカソ美術館でのシンポジウムで発表させていただきました。この場にもひろしま美術館から担当がいらっしゃっていて、この発見も含めて肉付けして一緒にやりましょうという方向へ進んでいきました。

**AMICS** 「青の時代」の油彩が日本にあること。収集された鈴木常司さん(ポーラ創業家2代目)の目利きということでしょうね。

**今井** 「青の時代」の作品は全部で100点ほどあるんですが、日本にある油彩は4点ほどで、あとは素描や版画です。その中でも《海辺の母子像》とひろしま美術館の《酒場の二人の女》は非常に重要で日本にあるのは驚くべきことです。欧米での「青の時代」の展覧会にもこの二つは不可欠な作品で貸し出しの要請を受けます。ポーラ美術館は残念ながらオープンを見ることなく亡くなった鈴木さんの審美眼が土台となっていますし、ひろしま美術館のピカソ作品もコレクターの眼力で集められました。日本がバブルに沸いた時代ですが、その恩恵を私達が今ひしひしと感じているわけです。またプライベートな美術館はバックに会社企業がある、ということはそのなかで醸成されたカルチャーがあって、それが人の中で共有されているのだと思います。ですから何かを始める際に、あそこに向かってやろうという方向性がコンパクトにでき上がるのだと感じています。

**AMICS** 今回の企画展ではバルセロナのピカソ美術館、カタルーニャ美術館から重要な作品がきていますが、貸出交渉から実現までの苦労はいかがでしたか。

**今井** 2023年はピカソ没後50周年でスペインも国を挙げての動きになっています。バルセロナのピカソ美術館も「青の時代」の作品は少ないですから、取合いのような状況になっていました。そしてコロナ禍です。収束するか?いや、収束するであろうという希望を抱きながら進めてきました。借りたのはいかがい開催できなかったらどうしよう、貸し手側の同行者(クーリエ)が入国できるのだろうか?さらには戦争がはじまってしまい、輸送はきちんとできるのだろうか?こんな時期に展覧会をやっているのだろうか?いや、こんな時期だからやらなきゃいけない展覧会にするんだ!そんな想いがふつふつと湧いてきて、自分たち自身を励ましたり、周りから励まされたり。なんとかやってこられました。

**AMICS** 会場を入るとすぐ、バルセロナの空の下で撮影された若きピカソと友人の写真が待っていました。眼のゴヨロリとしたよく知られたピカソとは全く違う青年ピカソが大変印象的でした。

**今井** うれしいです!監修に入っていたいただいたカタルーニャ美術館でピカソ研究をされているアデュアル・バジェスさんが、写真を撮ったピカソの親友マヌエル・バリャレスの子孫なんです。まだセルフイメージがはっきりしていない19歳の楽しそうなピカソ。「あっ、これがピカソなんだ!」ですすね。この写真をバジェスさんが「ぜひ使ってくれ!」というので特大ディスプレイにしたんです。日本では「ピカソってすごい人だと言うけど、なんだかよくわからないよね」と言う若い方が



「ピカソ 青の時代を超えて」展示風景 左の人物がピカソ Photo by Ken KATO

多いのですが、今回は10代、20代の方から面白かったという反応が多く、動画を使ってわかりやすくした研究成果「青のラボ」と合わせ、「青の時代」のピカソと同じ世代の鑑賞者に「青年ピカソ」を知っていただく機会になったようです。そのバジェスさんはオルタの出身で、スペインを代表するピカソ研究者です。ピカソのオルタでの作品がポーラ美術館にあるのはよくご存じで、「私もオルタに行ったことがあるんです」と話をしたら、喜びを爆発させて。話の熱量がまたすごいですよ。

**AMICS** 箱根の樹々に囲まれ、地中に埋められるようなポーラ美術館、日建設計さんでしたね。

**今井** 昨年20周年を迎えました。2004年の日本建築学会賞、BCS建築業協会賞をいただいています。建物を感じ取られにくい方、すごく多いんです。アンケートを拝見しても、展覧会の印象に負けない建物の人気を感じます。空間が美しい、居心地がいい、みなさんが普段とは違う感覚を解放されるような場所だと感じていただけているようです。もちろん建築テーマも「自然との共生」を目指している美術館なのですが、中にも明るい自然を感じますし、そういったところを展覧会づくりでも大事にしています。



上空から見たポーラ美術館

**AMICS** 次のテーマ、少しお聞きできますか。そして今井さんにとってのカタルーニャとは。

**今井** ピカソが生きてきた時代の女性アーティストの研究を進めたいです。彼女たちがどういう表現をしていたのか、社会の中でどんな制作をしてきたんだろう、この辺りに耳をすませて見直してみたいなど思っています。そしてカタルーニャ。私にはなんといいてもオルタでの体験です。岩が隆起したり、若い地層にみなぎるエネルギーが表層に溢れ出たりしている場所です。土地だけでなく(バジェスさんのように)人もそうでした。17歳のピカソが画家として歩む決意を固め、20代後半、パリの前衛画家として新しい絵画に挑戦するために再訪した土地です。サンタ・バルバラ山、いつか登ってみたい。私にとっても、いつまでもエネルギーをもらえる場所、ピカソの絵画のようにアクチュアルで、新鮮なひらめきを与えてくれる。度々訪れることができたらどんなに幸せでしょう!

### <AMICSの眼>

クリエイターでなくても美術に関わりたい。そんな思いがある(あった)人は多いのではないだろうか。学芸員として前に進んだ今井さん自身の「青の時代」とカタルーニャ、オルタのエネルギー。箱根の自然の中、お話の向こうに青年ピカソを感じた時間でした。

(取材/文 原正彦)

### 今井 敬子

ポーラ美術館 学芸部 課長。上智大学文学部フランス文学科卒業、ルーヴル美術学院修士課程修了、パリ第4大学ソルボンヌ考古学美術史学科修士課程修了。専門はフランス美術を始めとする20世紀美術。おもな担当展覧会は「ピカソ 5つのテーマ」(2006年)、「アンリ・ルソー パリの空の下で」(2010-2011年)、「紙片の宇宙 シャガール、マティス、ミロ、ダリの挿絵本」(2014-2015年)、「ピカソとシャガール 愛と平和の讃歌」(2017年)、「ピカソ 青の時代を超えて」(2022-2023年)

写真提供=ポーラ美術館